

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10783

研究課題名（和文）看護実践能力の向上に向けた技術習得過程のモデル化と教育プログラムの構築

研究課題名（英文）Modeling of skill acquisition process and development of educational programs to improve nursing practice skills

研究代表者

河合 桃代（Kawai, Momoyo）

帝京平成大学・ヒューマンケア学部・准教授

研究者番号：30746772

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：看護技術を授業で学び始める看護系大学2年生から新人看護師となる4年間の看護技術習得過程に関する縦断調査を行った。背景が異なる複数大学の学生が共に考えて、看護技術を学習する場として、ワークショップ（以下WS）を開催した。WSではテーマを決め、看護技術を繰り返し実施して考える機会を設けた。WSは対面とオンラインで、計10回実施し、のべ40名が参加した。参加者は、少人数で看護技術を実施でき、教員であるファシリテータにすぐ質問できる環境やテーマが有意義であったと評価していた。少人数で討論しながら自発的に繰り返し看護技術を実施する中で技術習得していく過程が見出され、教育プログラムの基礎研究になりうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【本研究の学術的意義】大学横断任意参加型ワークショップを実施し、看護系大学2年生から新卒看護師までを縦断的に調査したことで、看護基礎教育課程での看護技術習得プロセスがいかに看護実践へつながっていくのかという様相を明らかにした。

【社会的意義】看護系大学では学生数が多く、看護技術演習の授業は、限られた時間やスペースで教育せざるを得ない。そういう中、WSで少人数で学生の希望に沿った内容を繰り返し実施して考える機会をつくると、学生が試行錯誤しながら自ら看護技術のコツをつかんでいった。以上から、看護技術演習や練習ができる環境づくりや教育プログラムをつくっていく上での基礎研究として貢献できると考える。

研究成果の概要（英文）：A longitudinal study was conducted to assess the nursing skill acquisition by students, from the second year of nursing college, when students learn nursing protection skills in class, to the fourth year, when they graduate as nurses. The workshops were held as an opportunity for students from several universities with different learning backgrounds to think together and learn nursing skills. The workshops had several themes and taught different nursing techniques. A total of 40 nursing students participated in 10 in-person and remote workshops. Participants appreciated the fact that they could implement nursing skills in small groups and immediately clarify doubts with the facilitators, who were also faculty members, and that the topics were important. Overall, the findings of this study suggest that spontaneously repeating nursing skills while discussing them in small groups improves skill acquisition. The findings of this study could help in the development of educational programs.

研究分野：看護学

キーワード：技術習得 看護実践能力 技術教育 ワークショップ 追跡調査 nursing skills workshop training

## 1. 研究開始当初の背景

### 【看護基礎教育における技術習得の乏しい現状】

看護基礎教育と臨床現場で求められる看護実践能力に乖離がある(厚生労働省 2003)と言われて久しい。文部科学省では 2004 年に「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」を掲げており、10 年以上が経過した昨今の教育現場では、臨床推論や多重課題への取り組みが重視されている。また、近年では、看護学教育におけるモデル・コア・カリキュラムの導入において看護実践能力の重要性が明示されている。一方、看護技術について習得までいかに、「基本的な技術が身につけていない」(社団法人日本看護協会 中央ナースセンター事業部, 2005; 千葉県看護協会, 2023) ために離職する新卒看護師の実態や「自分の能力不足」で新卒看護師がストレスを抱えている現状もある(小野田・内田・津本, 2012)。基礎教育では学生は学生同士で体験すらできないこともある。看護技術の知識を学び、モデル人形で体験しても 1 回限りという授業の限界がある。また、臨地実習においても、患者に技術を実施する機会が乏しく、学生が制限されることも多い。そのため、看護技術を体得し、患者にあった援助を提供するところまで到達していない現状がある。

限られた授業時間で如何に技術を習得するかは、学生にとって課題であると同時に、教員にとっても課題である。

### 【生活行動援助の技術を習得する重要性】

先述したように、新人看護師は入職直後より、即戦力として生活行動援助を実施しなければならない。とりわけ、診療の補助に関する技術教育は、入職後すぐに off-the-job-training に組み込まれているが、生活行動援助については on-the-job-training として、配属された各部署で行われていることが多いため、安全性と質の担保が課題となる。卒業時に生活行動援助の技術を身につけて、一人で実施できるようになれば、自信にもつながり、リアリティショックの予防や離職防止にもつながり得る。現場で新人看護師が生活行動援助を患者へ即実施できるようにするためには、臨床現場を想定した看護実践能力を身につける必要がある。

## 2. 研究の目的

看護系大学 2 年生が新人看護師になるまでの 4 年間で縦断調査する。生活行動援助の看護技術を確実に身につけて体得し、患者に適した援助を提供する実践能力を身につける過程を明らかにする。また、技術教育の在り方をモデル化し、教育プログラムを新たに構築するため、4 年間で実施した看護実践能力を習得させる技術教育の構造を明らかにする。

## 3. 研究の方法

- (1) 研究デザイン: アクション・リサーチ(4 年間縦断的調査)
- (2) 研究参加者(ワークショップ参加者): 2019 年度看護系大学 2 年生
- (3) 研究期間: 2019 年~2023 年
- (4) ワークショップ開催計画: 年 3 回程度、研究者らの所属大学にて実施
- (5) 具体的なデータ収集方法

### 1) WS 開催・フォーカスグループインタビュー実施

参加学生募集: ワークショップの開催案内を看護系雑誌、SNS (Instagram)、大学掲示板(大学アプリを含む)にて、公募した。各応募者に対し、研究者が説明書を用いて口頭にて説明した。同意を得た後に、後日同意書に署名を得て、研究参加者、研究責任者各々で保管した。その際、同意撤回書も渡し、いつでも途中辞退できるよう配慮した。

WS 第 1 弾、第 2 弾は、研究者が WS のテーマを企画し実施した。第 3 弾以降は、参加学生の意向をもとにテーマを決定し、学生が参加しやすい時期から日時を決定した。

WS では、技術習得状況の把握や分析のため、肌の露出がある場合を除き、同意が得られた

場合、ビデオ撮影や録画を行った。WS 後、フォーカスグループインタビューを実施した。

研究者は、WS やフォーカスインタビュー時には、ファシリテータの役割を担った。

## 2) 新人看護師への個別インタビュー

新人看護師として入職して落ち着いた時期を見計らい、同意が得られた参加者に個別インタビューをオンラインにて実施した。同意を得て、音声を録音した。

### (6) 分析方法

ビデオ撮影や録画内容を参考にフィールドノーツを作成し、インタビューデータを逐語録にして分析データにし、WS を通した気づきやコツ、手応えなど看護技術の習得に焦点化して質的帰納的に分析した。

### (7) 倫理的配慮

研究者所属の研究倫理審査委員会で承認を得て実施した。応募してきた学生に対し、説明書を用いて研究者が説明した。説明内容では、研究協力は自由意思であり、いつでも辞退可能であること、研究参加や辞退が成績や大学生活等への不利益を被らないこと等保障した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究参加者

看護系大学2年生学生～新人看護師まで、合計40名、所属大学は3都県5校だった。各参加者の参加回数は1回～7回で、平均参加回数は2.3回、5回以上参加したのは8名だった。各回の参加者は4名～21名で、1回平均9.9名だった。

### (2) ワークショップ(WS)

看護技術を学習する機会の場合としてWSを実施し、看護技術のテーマを決め、繰り返し実施して考える機会を設けた。2年生は対面で3回実施、Covid-19の影響でオンラインにて3年生に3回、4年生に4回、新人看護師の際は、対面で1回実施した(表1)。

表1. WS開催内容と参加人数

| WS | WSテーマ   | 形式     | 参加人数 | 当時  |
|----|---|--------|------|-----|
| 1  | 第1弾! ギジツでつながるワークショップ(WS名は以下同じ)熱布バックケア                               | 対面     | 21   | 2年生 |
| 2  | 第2弾! 動きの援助  | 対面     | 11   | 2年生 |
| 3  | 第3弾! 陰部の清潔ケア  | 対面     | 16   | 2年生 |
| 4  | 第4弾! その環境整備大丈夫? 今だからこそ! 感染予防のためのPPE(個人防護具)つけ方 外し方                   | online | 12   | 3年生 |
| 5  | 第5弾! 実習に役立つ観察技術を磨こう!! ベッドサイド編                                       | online | 9    | 3年生 |
| 6  | 第6弾! 実習に役立つ観察技術を磨こう! ベッドサイド編 パート2                                   | online | 8    | 3年生 |
| 7  | 第7弾! 状況設定問題?! 患者さんの状況に応じた看護ギジツ～国試対策にもつなげよう～(認知症患者へのコミュニケーション)       | online | 7    | 4年生 |
| 8  | 第8弾! 国試の状況設定問題の深掘り?! 学習支援ギジツ～患者さんや家族へどのように説明しますか?～(COPD患者や家族への学習支援) | online | 6    | 4年生 |
| 9  | 第9弾! 国試の状況設定問題の深掘り?! -part2- 心不全の方への学習支援ギジツ～患者さんや家族へどのようにかわりますか?～   | online | 5    | 4年生 |

|    |                           |        |   |       |
|----|---------------------------|--------|---|-------|
| 10 | 第 10 弾！ ギジツつでつながる「ホッとカフェ」 | online | 4 | 4 年生  |
| 11 | 第 11 弾！ ザ 同窓会             | 対面     | 4 | 新人看護師 |

### (3) インタビュー

フォーカスグループインタビュー：・WS 毎に、終了後、フォーカスグループインタビューを実施し、1 回 20 分～37 分で、合計 10 回、WS で実施した内容について語り合った。

個別インタビュー：新人看護師になった参加者（以下看護師）7 名には、看護師として働いて感じていること、ケアしながら WS を思い出すことがあるか等をオンラインでの個別インタビューで尋ねた。インタビュー時間は、一人 1 回 55 分～78 分で、平均 61.4 分だった。

### (4) WS1 回の中での看護技術習得：動きの援助

参加者は 2 年生で、動きの援助技術習得過程では 9 つのカテゴリーが抽出された（河合・大宮・内山他，2024 予定）。ファシリテータが最初に見せたデモンストレーションがうまくいかなかったことを機に、参加者はどうしたらうまくできるのか各々探求していた。学生はスライディングシートなど道具を使いこなせず【こうするとうまくいかない失敗体験をする】ことで、手技により患者や看護師側も負担になることに気づいた。【失敗体験から原因を追究する】ことでポイントを見つけ、【試行錯誤して実践してみる】ことで【失敗体験からコツをつかむ】ことができた。移動や移乗時に患者役の重心の流れを感じ取ると動きやすく、ファシリテータの助言をいかすことで【こんな感じの場合うまくいく成功体験をする】ことができた。【患者の動きやすさがコツの指標になる】と捉え、【コツがわかると看護師側の体も楽だと実感】した。さらに、1 年次と 2 年次の【授業で学習したことで体得したコツがつながる】体験をしていた。

### (5) WS1 回の中での看護技術の変容プロセス：認知症患者へのコミュニケーション技術

参加者は 4 年生で、Covid-19 の影響を受けながらも全員領域別実習を終え、認知症患者、同居家族や模擬患者等との関わりで戸惑った体験をしていた（河合・大宮・内山他，2022）。今回、認知症患者とのコミュニケーション技術の変容として 6 つのプロセスが見出された。

参加者は、基本的な認知症の方への知識はあるが、【事例の場面だけで考える】ことをしていた。ファシリテータの問いから【認知症患者が過ごす状況を想起し始める】と、視点を広げたケアの提案をし始め、【他者の意見を取り入れ自分の意見を言語化する】ようになった。【自分の視点が広がる変化を感じ取る】ことで認知症の方の背景や嗜好、持っている力に着目し、このようにすればこうなるという予想を活発に語り合った。さらに、学生の問いかけがファシリテータの体験談引き出し、【事象を多角的な視点で捉えて解釈が広がる】変容が見られた。

### (6) WS に参加経験のある新人看護師が現場で感じていること

研究に同意が得られた看護師ら 7 名は、大学 2 または 3 年から 4 年生まで 1 人 5 回～7 回 WS に継続的に参加していた（河合・内山・山口他，2023）。

看護師が現場のケアでから感じていることとして 6 つのカテゴリーが抽出された。看護師は、WS で患者を受け止める声かけが大切だと学んだことと目の前の患者を重ね、【患者を尊重するコミュニケーションの大切さ】を実感していた。WS の学びからケア時に【認知症患者の強みを生かした対応の重要性】を念頭におき実践していた。【認知症患者の強みをいかした対応を考える】ことをケア時に大事にして実践していた。患者や家族の訴えから WS で体感したスライディングシートを思い出して情報提供するなど【技術練習 WS での体験を患者へのケアに活かす】ことをしていた。【何があっても患者のために安全確認の時間は削らない】と患者を最優先していた。業務を回すことに精一杯な中【ケアを考える時間が今こそ重要】と再認識し、【様々な考えを吸収することが大切】だと感じていた。

### (7) 考察

看護系大学 2 年生が新人看護師になるまでの 4 年間の縦断調査では、看護技術を学習する機会の場として WS を実施し、一つの看護技術のテーマを決め、繰り返し実施して考える機会を設けた。ここでは、一つ目として、ワークショップを通して明らかになった学生の看護技術習

得過程と、二つ目として、看護技術教育のプログラム構築のための提言について記述する。

### 看護系大学 2 年生が新人看護師になるまでの看護技術の習得過程－ワークショップを通して見えたこと

参加者は、2 年生では対面で授業や実習を体験し、3 年生から 4 年生は Covid-19 の影響を受けながら基礎教育を終えたことが特徴的であった。2 年生の対面や 4 年生のオンライン WS においても、1 回の WS において、少人数で一つの看護技術を繰り返し実施し、どのようにしたらよりよいのかを、参加者同士やファシリテータの意見を取り入れながら考え、自発的に試行錯誤していた。2 年生では授業で学習したポイントを WS で練習しながら確かめていた。4 年生では、ディスカッションを通して患者への看護援助の視野が広がると、多角的に事象を捉えていた。新人看護師になってからは、WS の経験を踏まえ、現場でケアを実践しながら、患者を尊重するコミュニケーション、患者の強みをいかす対応を考えており、時間に追われながらも WS に参加した時のように、考えることがいかに重要かと捉えていた。

参加者は、自ら看護技術を学びたいと積極的な姿勢で WS に参加しており、新人看護師になっても、WS での体験を思い出しながら、看護技術を通して患者との関わりを重要視していたことが明らかとなった。

### 看護技術教育のプログラム構築に向けて

少子化が受験者数に色濃く反映する一方、看護系大学はいまだ増加している現状がある。私立大学の場合、1 学年の学生数が 100 名を超えている大学も多く、授業時間や演習スペースには限りがあり、教員 1 名あたりの学生数が多い中で、演習を実施することが余儀なくされる。

今回の WS 参加者は、学生と教員であるファシリテータとの距離が近く、少人数で教えてもらえることに充実感を抱き、WS の継続参加のきっかけの一つになっていた。また、少人数により、ファシリテータも目が届き、双方向に呼応しながら、一緒に学んでいく姿勢ができた。WS では、授業や実習で習った経験を想起しながら看護技術を練習していくことで体得したコツを実感していた。学年ごとに関心のあるテーマで実施することが参加の継続になっていた。

以上から、本研究は、少人数で討論しながら自発的に繰り返し看護技術を実施する中で技術習得していく過程が見出され、教育プログラムの基礎研究になりうると考える。

<引用>

河合桃代・大宮裕子・内山孝子・茂野香おる・殿城友紀・山口みのり(2022)大学横断型ワークショップによる看護学生の変容プロセス；認知症の方へのコミュニケーション技術を焦点に、第42回日本看護科学学会学術集会抄録 PDF,p.372 .

河合桃代・内山孝子・山口みのり・茂野香おる・殿城友紀・大宮裕子(2023)新人看護師が現場のケアで感じていること－大学横断任意参加の看護技術ワークショップの経験を通して－、第43回日本看護科学学会学術集会,10日口演抄録 PDF , pp.104-105.

河合桃代・大宮裕子・内山孝子・山口みのり・殿城友紀・茂野香おる(2024)看護学生の「動きの援助」技術習得過程－大学横断任意参加型の看護技術ワークショップを通して－、第44回日本看護科学学会学術集会,発表予定 .

一般社団法人日本看護系大学協議会データベース委員会・一般社団法人日本私立看護系大学協会大学運営・経営委員会(2018)『看護系大学に関する実態調査』2018年度状況調査, [7244def413aa5ac4c2552346fb3d880b.pdf](https://www.jspcun.or.jp/7244def413aa5ac4c2552346fb3d880b.pdf) (jpscun.or.jp)

社団法人日本看護協会 中央ナースセンター事業部(2005)2004年新卒看護職員の早期離職等実態調査報告書,社団法人日本看護協会 中央ナースセンター事業部,東京 .

小野田舞・内田宏美・津本優子(2012)新卒看護師の職場適応とその影響因子に関する縦断的研究,日本看護管理学会誌,16(1),13-23.

千葉県看護協会(2023)「令和5年度看護職定着確保動向調査(新人看護職)」結果概要, [20231108134706.pdf](https://www.cna.or.jp/20231108134706.pdf) (cna.or.jp)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>河合桃代, 大宮裕子, 内山孝子, 山口みのり, 殿城友紀, 茂野香おる          |
| 2. 発表標題<br>看護学生の「動きの援助」技術習得過程—大学横断任意参加型の看護技術ワークショップを通して— |
| 3. 学会等名<br>第44回日本看護科学学会学術集会                              |
| 4. 発表年<br>2024年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>河合桃代, 内山孝子, 山口みのり, 茂野香おる, 殿城友紀, 大宮裕子             |
| 2. 発表標題<br>新卒看護師が現場のケアで感じていること—大学横断任意参加の看護技術ワークショップの経験を通して— |
| 3. 学会等名<br>第43回日本看護科学学会学術集会, 10日口演抄録PDFpp104-105.           |
| 4. 発表年<br>2023年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>河合 桃代, 大宮 裕子, 内山 孝子, 茂野 香おる, 殿城 友紀, 山口 みのり         |
| 2. 発表標題<br>大学横断型ワークショップによる看護学生の変容プロセス; 認知症の方へのコミュニケーション技術を焦点に |
| 3. 学会等名<br>第42回日本看護科学学会学術集会抄録PDF, p.372.                      |
| 4. 発表年<br>2022年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>河合桃代, 茂野香おる, 山田悦子, 坂下貴子, 内山孝子, 後藤奈津美, 牧野美幸, 佐久間和幸 |
| 2. 発表標題<br>看護学生が反復練習により技術習得して臨地実習にのぞむ意味 熱布バックケアを通して感じた手応え—   |
| 3. 学会等名<br>日本看護技術学会第18回学術集会講演抄録集                             |
| 4. 発表年<br>2019年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                  | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 茂野 香ある<br>(Shigeno Kaoru)<br>(00208612)    | 淑徳大学・看護栄養学部・教授<br><br>(32501)        |    |
| 研究分担者 | 山口 みのり<br>(Yamaguchi Minori)<br>(00369480) | 静岡県立大学・看護学部・准教授<br><br>(23803)       |    |
| 研究分担者 | 殿城 友紀<br>(Tonoki Yuuki)<br>(60440252)      | 日本赤十字看護大学・さいたま看護学部・講師<br><br>(32693) |    |
| 研究分担者 | 内山 孝子<br>(Uchiyama Takako)<br>(80781624)   | 神戸市看護大学・看護学部・准教授<br><br>(24505)      |    |
| 研究分担者 | 大宮 裕子<br>(Oomiya Yuko)<br>(90604611)       | 目白大学・看護学部・教授<br><br>(32414)          |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|